

インドの思い出

大森海太

インドには会社の出張で八回行った。目的はコルカタ（旧カルカタ）を南へ車で三時間、フグリ川河口のハルディアにある化学工場だ。

仕事の話はさておき、川沿いには多数の煉瓦を焼く窯があつて、そこで働いている人やその家族で賑わっている。この人たちは土を扱うので不可触民として厳しく差別アンタッチャブルされているのだが、我々の目には普通のインド人となんの変わりもない。

そういえばハイテクの町バンガロールでゴルフをしたときのこと。前の組のプレイヤーは上流階級の人だということで、ティーアップもホールから球を拾い上げるのも自分では一切やらず、すべて専属のキャディーまかせ。貴人は地面に手を触れないものだそうである（転んだらどうするのだろう?）。

ニューデリーの南東、かの有名なタージマハールを訪れた。ゲートをくぐると彼方に白亜の霊廟が見渡せる。ムガル帝国五代皇帝シャー・ジャハーンが愛妃のため二十年かけて建立したのだが、写真で見ると全く同じで、へそ曲がりの私には感激はイマイチだ。シャー・ジャハーンはさらに対岸に黒大理石で自分の霊廟を建てようとしたところ、息子の六代アウラングゼーブに廃位され近くのアグラ城に幽閉されてしまう。このごついアグラ城のほうが見ごたえがあつた。

インドでの苦い思い出。コルカタ空港のビジネスクラス待合室でコーヒーを飲もうとしたら、ボーイが現れて「ミルク?」とポットを向けてきたので、なにげなく「イエス、プリーズ」。結果はてきめんで離陸後三十分もしないうちに下腹に異変を覚えトイレに駆け込む。帰国後も下痢の症状は一ヶ月近く続いた。インドのミルク、侮るべからず。

このほかにインドの思い出は数々あるが、多民族、多言語、多宗教、カーストの名残りなどが重なりあつて、八回くらいの訪問では象の鼻先を撫でたにすぎない。

人口でも今年中国を抜いて世界一になるとやら、島国日本とは両極端であるこの国のスタンスや、その将来には目が離せない。